

日本語学習動機づけと興味の関連性に関する研究： 香港の中等教育の学習者を対象に

山下, 直子

<https://hdl.handle.net/2324/4475208>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	山下 直子			
論文名	日本語学習動機づけと興味に関連性に関する研究 —香港の中等教育の学習者を対象に—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松永 典子
	副査	九州大学	教授	郭 俊海
	副査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副査	九州大学	准教授	李 相穆
	副査	東京大学	講師	根本 愛子

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語学習動機づけと興味に関連性を解明し、日本語学習の継続、促進につながる対応策について論じたものである。そのために、中等教育の日本語学習者を対象に質的研究を行い、日本文化、日本語、日本語学習に対する興味の要素および興味を喚起、維持する要因を探った。

国際交流基金の調査（2020）によると、海外における教育段階別日本語学習者（以下、学習者）は中等教育段階がもっとも多く、それに次ぐ高等教育段階をあわせた割合は69.5%にのぼる。その一方で、特に中等教育における「学習者不熱心」の問題が挙げられ、その対応策が求められている。中等教育の学習者の学習目的・理由は「マンガ・アニメ・J-pop・ファッション等への興味」（73.5%）「日本語そのものへの興味」（59.5%）といった「興味」が1、2位を占める。従来の興味研究において、学習者の興味は学習過程や学習成果に重要な変数であることが明らかにされている。こうした興味に着眼した佐藤（2017）は、日本語そのものへの興味を構成する要素を抽出し、根本（2014）は、日本のポップカルチャーから日本自体へと興味の対象が移るプロセスと学習開始動機との関連を示した。つまり、先行研究では興味が学習開始時の学習動機づけに関与することはわかったが、個々の学習者がこうした興味を学習とどう関連づけ学習を継続しているかは解明されていない。しかも、それらは主に高等教育の学習者と社会人を対象とした調査であり、中等教育の学習者を対象とした興味の解明が求められる。そこで、本研究では、中等教育における「学習者不熱心」の課題を抱える香港の高校生を事例として取り上げ、課題の解明に取り組んだ。具体的には、以下3つの研究課題、すなわち、1）中等教育の学習者の日本語そのものへの興味を構成する要素とは何か、（2）日本文化、日本語学習、それぞれに対する興味はどのような要因から喚起、維持されるか、（3）学習者の興味と日本語学習動機づけはどのように関連するか、を設定した。

本論文は8章から構成される。第1章では、研究背景、研究目的について述べた。第2章では、興味研究および日本語学習動機づけ研究について概観し、先行研究における問題点を述べた。第3章では、本研究の研究課題と学習者の興味と学習動機づけの変容を把握するために質的研究の必要性を述べた。第4章では、中等教育の学習者の日本語そのものへの興味を構成する要素を探った。第5章では、中等教育の学習者の興味を喚起する外的要因、内的要因を探索した。6章では、中等教育の学習者の興味と日本語学習動機づけとの関連性を明らかにし、第7章では、中等教育の学習者の結果の検証のため高等教育の学習者の興味と日本語学習動機づけとの関連性を解明した。第8章では、これらの結果をもとに総合的な考察を行い、結論と今後の課題を述べた。

研究課題（１）の解明にあたり、中等教育の学習者を対象に自由記述による質問紙調査を行い、KH Coder（計量テキスト分析ソフトウェア）を用いて分析した。その結果、「文字」「文法」「音」の３つの興味の要素が抽出され、それら３つの要素は、個別的なものではなく、相互に関連する複合的な要素であることがわかった。また、比較的容易に喚起する感情的興味からコミュニケーションや知識獲得への価値を見いだす価値的興味があることがわかった。研究課題（２）では、中等教育の学習者にエピソード・インタビュー調査を行い、興味の喚起、維持、発達に関わる外的要因、個人的な内的要因を探索した。その結果、重要な他者との体験は興味の発達段階において重要な役割を果たすことがわかった。また、学習者は自ら興味を利用して繰り返し日本語学習に取り組んでいた。つまり、自己調整を行い楽しみながら日本語学習を行っていた。これらの結果からは興味の発達と自己調整には相互作用の関係があることが示唆された。研究課題（３）では、中等教育の学習者へのインタビューデータをもとに、日本語学習動機づけと興味の関連性を分析した。さらに、その結果を検証すべく、高等教育の学習者へのインタビュー調査を行った。分析の結果、学習者個々が持つ日本文化、日本語学習への興味は、内発的動機づけの始発であるだけでなく、同一化的動機づけへも作用する可能性がみられた。つまり、本研究では、興味の発達は複数の動機づけに関連していることが示唆された。これらの結果は従来の量的な研究では示されていなかった点であり、興味の発達段階と自律化に向けた価値の内面化のプロセスとが同時並行的に展開される可能性を示すものである。

以上の結果より、日本語学習の継続、促進のための対策として、中等教育の日本語学習者の興味の発達段階に応じた継続的な支援を行うことの必要性を指摘できる。それは、比較的容易に喚起する感情的側面から、日本語学習の価値を内面化する段階を経た興味への働きかけを意味する。そして、それと同時に、学習者自ら自己調整する能力の育成を支援することも必要である。こうした興味にもとづく自発的な行動と自己調整する力が育成されることにより、日本語学習の促進及び学習効果の向上が期待される。以上のように、本論文では教育段階に応じて興味の発達を支援するという新たな視座から日本語学習の継続、促進につながる対応策を提起した。

これらの知見は従来の量的な研究では示されていなかった点であり、興味の発達を支援するという新たな視座を学習動機づけ研究に提供した点で独自性を有するものである。したがって、本研究は学習動機づけ研究及び興味研究といった第二言語習得研究の分野に新たな知見をもたらすものとして、博士（学術）に値する価値ある業績であると判断された。